



テーマ：人権保育推進に関わる課題を共有しよう

常磐会短期大学 教授 ^{しめだ しんいちろう} 卜田 真一郎さん



人権保育専門講座 8は、4回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

この連続講座は、各回で取りあげるテーマについて、3つのステップを踏みながら、段階的に学びを深める形ですすめていきます。

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| ステップ1 | 各現場で抱えている課題を『共有』する。 |
| ステップ2 | お互いの取組を『交流』する。 |
| ステップ3 | 人権保育推進のため、誰に対して、何を、どのように『発信』するのかを考える。 |



連続講座第1回目となる今回は、「人権保育推進にかかわる課題を共有しよう」をテーマに、人権保育推進にかかわる保育現場での課題と実践を共有し、今後の取組をどのようにすすめるかをグループに分かれて話し合いました。

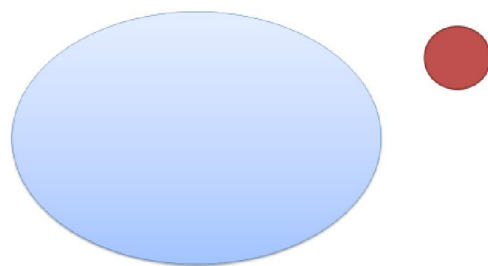


1. 人権保育推進のための基本を考える

(1) 「多様化する社会」はどこに向かうべきか

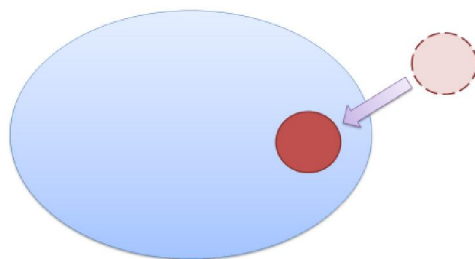
社会はどんどん多様化しています。人権問題を考えるとき、「マイノリティ」（少数派）と「マジョリティ」（多数派）という考え方があります。青い大きな丸が「マジョリティ」、赤い小さな丸が「マイノリティ」だと考えてください。保育の現場で言うと、例えば、青い丸が「日本語を

話せる子」、赤い丸が「ニューカマーの子どもたち」です。ニューカマーの子どもたちにとって、日本語を話せないことは、先生の話が理解できなかったり、友だちと遊ぶ際に言葉でのやりとりができなかったりするなど、生活上の不具合を生じさせます。また、園・所と家庭とのコミュニケーションもとりづらくなります。「違い」があることによって、様々な生きづらさが生じている状態です。では、そのような状態をどのように解決していけばよいの



でしょうか？こうした問題は、外国人の人権にかかわる問題に限らず、他の人権問題や園・所の集団づくりにおける問題とも重なります。例えば、クラスのみんなで遊ぶときに、集団から離脱して一人で遊ぶ子がいます。このような子がどうなっていくことがよいのでしょうか？また、みなさんのなかに左利きの方がいるかもしれません。給食の配膳をするときに使用するお玉や、はさみ、駅の自動改札機など、社会には一般的に右利き用に作られているものが多いため、左利きの人たちは生活をするうえで様々な不具合を抱えさせられています。こうした状況をどうしていけばよいのでしょうか？ここ数年、社会的に人権問題であると認識されてきたセクシュアルマイノリティの人権にかかわっても、同様です。つまり、今の社会には「違い」による生きづらさが生じているのです。こうした「違い」による生きづらさをどのように解消していくのかを考えていきたいと思います。

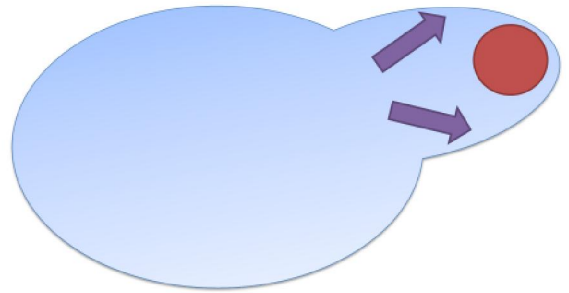
解決に向けた考え方として、「少数派の人たちが多数派の人たちに合わせる」というものがあります。しかし、これで本当に問題は解決するのでしょうか？日本語を話せないニューカマーの人たちが日本語を話せるようになったとしても、問題をすべて解決したことはなりません。ニューカマーの子どもたちが日本語だけを話せるようになったとします。しかし、保護者の方が外国人のコミュニティのなかで生



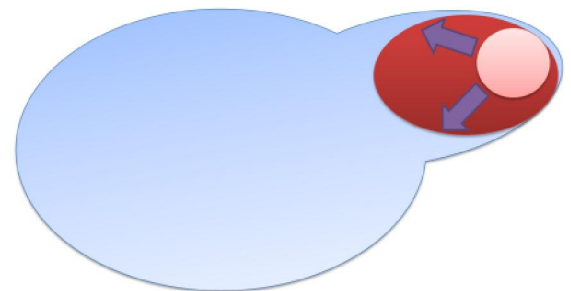
活している場合、何年日本に滞在していようが日本語を話せるようにはなりません。そのような場合、親子のコミュニケーションがとれなくなり、進路にかかわることなど重要な事柄を親に相談できなくなります。こうした状況が続くと、日本語が話せない親のことが疎ましく感じたり、自分の民族的ルーツを否定的にとらえたりすることにつながっていきます。保育のなかの集団づくりに当てはめて考えると、「この子がみんなと同じにならなければ遊べない」ということになります。同じクラスであっても、子どもたちにはそれぞれの発達段階があり、遊びのなかで「楽しい」と感じるツボも違います。「少数派が多数派に合わせる」という考え方では、それぞれが違って当然なのに、子どもたちどうしが「この子が同じにならない限り遊べない」ととらえてしまうことになります。また、「同じであることを強制すること」は、少数派の人たちの生きづらさを増幅させることにもつながります。このように考えていくと、「同じであることを強制すること」は間違っていると気づきます。しかし、今の日本社会は協調性が重視される傾向にあり、園・所・学校で行われている集団づくりも知らず知らずのうちに、「同じであることを」を求

めてしまいがちです。

もう一つの考え方は、「多数派が考え方や生き方を広げていく」というものです。左利きの人にとっても右利きの人にとっても使いやすい道具があれば、両方の人にとって生活しやすくなります。保育のなかに置き換えると、「日本語が話せないから一緒に遊べない」ではなく、「日本語が話せなくても、こうしたら一緒に遊べる」と考えていくことで、日本語を話せない子どもが居場所をつくることができます。また、こうした考え方のなかでは、マイノリティの人たちの居場所をつくることだけでなく、マジョリティの人たちにとっても考え方や生き方が多様になることにつながります。人権保育を通じて、こうした考え方のもとに集団づくりを経験した子どもたちは、多様な人と一緒に社会をつくる方法を知ることができます。例えば、言葉が通じなくても一緒に遊んで楽しんだ経験を積んだ子どもたちは、将来、いろんな違いをもった人たちと共に社会をつくっていくことができるでしょう。みなさんのクラスからも、そうした子どもたちを育てることができるということです。



図のように社会が広がるということは、園・所の子どもや保護者の考え方・ものの見方が広がるということでもあります。「一緒に遊べないな」から「こうすれば一緒に遊べるよ」と広がっていくということです。また、外国にルーツのある子どもが、「母国語も日本語も話せる」というように広がっていくと、より日本の社会のなかで生きていくチャンスも広がっていきます。このように、共に広がっていくことが重要なのです。



もちろん、簡単にいかない問題もあります。例えば、イスラム教を信仰する家庭で育つ子どもにとっては、「いただきます」を言うときに手を合わせる行為に抵抗をもちます。なぜなら、手を合わせる行為は、仏教の信仰を表すものだからです。私たちは、当たり前のように手を合わせて



「いただきます」をしているので、なぜイスラム教を信仰する人たちがこの行為に抵抗を示すのか理解できません。こうした場合に、どうすれば一緒にできるのかを考えることは簡単なことではありません。簡単にはわかり合えないことがあるのも事実です。いずれにしても、「少数派が多数派に合わせる」という考え方では、わかり合うことができないのは間違いありません。難しくても、一緒に生きていく方法を考えていくことが重要なのです。

アメリカで人権保育の研究をしているダーマン・スパークスという人が、『ななめから見ない保育』という著書のなかで、次のようなことを述べています。

“問題が起こるのは、相違点それ自体があることではなく、相違点にみんながどのように反応しているかによって起こるのです。”



このことを大前提として共有したうえで、保育をすすめていただきたいと思います。

家庭支援をする際にも、子どもとかわる際にも「普通はこうするよな」、「だから、できないあなたが悪い」と考えてしまいがちです。しかし、いろんな「違い」があるなかで「普通」が通らなくなることがあります。「あなたができないから悪い」という考えでは通らないということは、日常的に家庭支援を行っておられるみなさんは、実感してみえるのではないのでしょうか。

（２）共に生きることを実現できる関係性を育てる

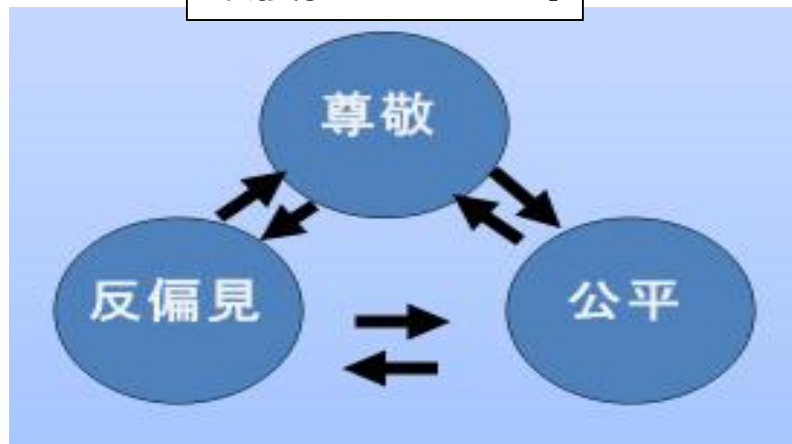
集団をつくるということは、集団がもつ価値観やものの見方を変えていくことでもあります。集団とは、クラス、保護者集団、保育者集団、社会です。その集団や社会に生きるすべての人に居場所があり、共に生き生きとできるような価値観が共有されることが重要となります。

集団づくりの要は「価値観を育てる」ことです。様々な生きづらさを抱えさせられた子どもや保護者を中核に据えた集団づくりをすすめる際には、当事者が生き生きとできるだけでなく、当事者をとりまく人たちが、多様な個性を認め、共に生きていく力を身につけるという視点をもつ必要があります。今担任しているクラスが平和であればいいということではなく、クラス集団づくりは、将来と社会をつくっていく営みであるにとらえましょう。保育は、子どもたちが多様性を尊重した社会づくりの担い手となるための基本的な力を身につける場なのです。

（３）集団のもつ価値観としての「人権力のトライアングル」

玉置哲淳先生（大阪総合保育大学教授）は、人権保育のなかで、「尊敬」「公平」「反偏見」という3つの価値観を子どもに育てることの必要性を説いています。この3つの価値観は、一人ひとりの子どもの力として育てるだけでなく、集団の価値観としても育てていく必要があります。子どもの集団に限らず、保護者集団、保育者集団、社会においても同様です。

「人権力のトライアングル」



◆人間を尊敬する力(尊敬)

「自分のことが好き」「仲間のことが好き」という気持ちを持ち、自分や仲間の尊厳を守るために行動できる力を育てること

◆公平性の獲得(公平)

不公平な状態に気づき、その改善のために、順番ですることや、みんなが納得するような役割分担ができるなど、公平ということの意味が分かり、その論理が使えること

◆偏見をなくす力(反偏見)

偏見を「おかしい」「いやだ」と感じ、偏見をなくそうと行動すること

(4) 子どもと保護者の現実から保育は始まる

この後、保育現場の課題をブレンストリーミング(*)で出し合ってもらおうのですが、出発点にしてほしいのは、子どもや保護者の現実です。気になる子の姿から、クラス全体の保育課題を見出していくことが非常に大切です。気になる子の姿が目立ってくる背景には、クラスのなかにあるものの見方や考え方、価値観があります。先ほども言いましたが、子どもは発達段階によって、遊びのなかで感じる楽しさが違います。クラスのなかで、発達が比較的ゆったりした子どもが、いつも遊びのなかで孤立してしまっていたとします。その子は、面白くないので集団のなかで目立った行



動をし始め、周りの子どもとトラブルになりがちです。こうした行動の原因は、クラスのなかにある「好きな遊びが違う子とは、一緒に遊べない」という価値観です。また、クラスから飛び出してしまう子に対して、クラスのなかに冷やかな雰囲気があったとします。この場合、クラスのなかに「飛び出してしまう子の思いを想像してみよう」という価値観がないことが問題です。もしかすると、そういう価値観がクラスに満ちていれば、その子は飛び出さずに済むかも知れません。クラス集団や保育者の価値観をどのように変えていくのかを考えていくことが重要なのです。また、保育者自身がクラス集団のどのような現実が気になるのかを問い直すことも大切です。そうすることで、保育者自身がどのような価値観をもっているのかを確認することができるからです。

(*)ブレインストーミング：創造性を開発するための集団的思考の技法の一つ。会議のメンバーが自由に意見や考えを出し合って、すぐれた発想を引き出す方法。

2. とともに考え合うことを通して深めよう

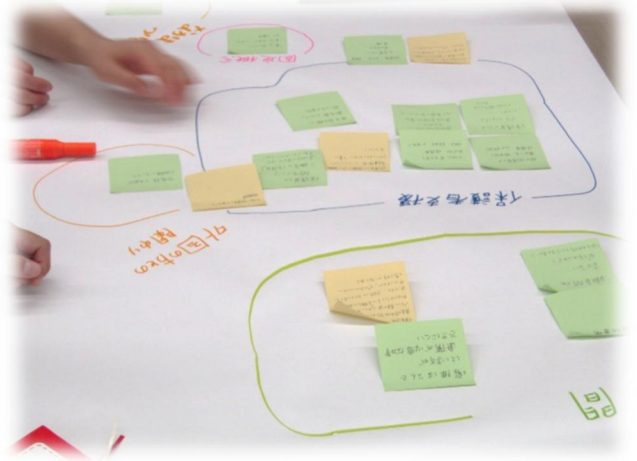
現在、各保育現場で一人ひとりが抱えている人権保育推進にかかわる課題について、ブレインストーミングの手法を使いながら共有しました。その後、グループごとに出された課題を整理し、その課題解決に向けて、園・所ではどのような実践がなされているのかを交流しました。ワークの目的は、次の3点です。

- ①改めて課題と感じていることを考えることで、現在直面している課題を意識化する。
- ②他の参加者が感じている課題を共有することで、問題点を整理する。
- ③各現場での実践を交流することで、自園の取組にいかす。



3. 人権保育推進の「発信（次の一歩）」を考えよう！ ～未来への種まきワーク～

一人ひとりが「発信（次の一歩）」としてやってみようと思うことを考え、人権保育推進のための『種』をまきました。具体的には一人ずつが付箋に自分のできることを書きました。全員で輪になり、その小さな『種』（できることを書いた付箋）を『畑』（模造紙）に貼って（種まき）いきました。



参加者のアンケートより

- 保育者の価値観が、子どもにも職員にもつながっていってしまうということで、家庭推進保育士の立場をあらためて見直すきっかけになりました、日々の保育の反省が多かったです。
- 「尊敬」「公平」「反偏見」など、人権保育の基本的な考えがよくわかりました。円から離れたところに立っている子どもや保護者の気持ちを考えていくこともよくわかりました。また、ワークショップでは、同じ思いの家庭推進保育士の立場で共感できることがたくさんありました。
- 昨年に引き続きの参加です。1年間、悩んでいた自分の思いを、市外の先生方と共有できてよかったです。悩みは変わったものと変わらないままのものがありましたが、このような機会をいただけることで次に進むことができます。ト田先生の話は、いつもわかりやすく、とても勉強になります。
- 初めて講座に参加して、ト田先生の講義の内容がとても理解しやすかったです。多様化する社会の向かうべき方向についてお話いただいて、「共生」とはということなのかがよくわかりました。自分は「同化」をめざす保育をしているのではないかとふり返ることができました。